
始業のベルとともに一日が始まる。

ミズキシホ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始業のベルとともに一日が始まる。

【Nコード】

N2960G

【作者名】

ミズキシホ

【あらすじ】

単調な毎日。あなたは耐えられますか？

始業のベルとともにまた一日が始まる。
退屈で単調な瞬間の果てしない繰り返し。

やれやれ……。

僕はそろそろその部屋へ入る。

そして僕はただ、

そこに並べられた金属製のベッドに身を横たえるだけ。

毎日毎日、時間から時間までそうしている。

それが仕事だ。

考える事は許されない。

むしろ、

何も考えない方がいい。

自分は何の為に存在しているのか？

毎日毎日、こうして、自分は何をしているのだろう？

何のために？

誰のために？

疑問が疑問を生み、叫びだしたくなる。

発狂しそうになる。

とはいえ、

自分の「存在意義」に考えを巡らしているヤツなんて実はいない。

みんながみんな、一抹の疑問も持たず、

毎日毎日、毎時間、毎分、毎秒、義務を遂行している。

ぼく以外は。

「なあ、おい」

ぼくは隣のベッドのヤツにこっそり声を掛けた。
会話する事は禁止されている。

隣のヤツは返事をしない。

「なあ、つて、おい……！」

隣のヤツは、めんどくさそうに目を開け、
明らかに迷惑そうに、
少しだけ顔をこちらへ向けた。

「なあ、

ぼくらはこうして、

何をしているんだろう？

何のために？」

ぼくにそう話しかけられて、

そいつは、

目で、「はあ？」という顔をした。

ぼくはもう一度同じことを言った。

「ぼくらがこうしているのは何の為なんだ？」

そいつは、

「なにを言っているのか分からない」
というような、

戸惑いと蔑みの感情を目に表すと、
相変わらず何の言葉も発せず、
また目をつぶった。

ぼくは、ソツと周りを見回した。
みんな、静かに身体を横たえている。
ぼくのように、そわそわと落ち着きのない者はいない。

なんなんだ、ここは……。

ぼくはなぜここに……。

なぜなんだなぜなんだなぜなんだなぜだなぜだ……。

考えているうちに、まどろんでしまっていたらしい。
終業のベルで目が覚めた。

みんなが鉄のベッドから起き上がり、
そろそろと部屋を出る。

そしてまた別な部屋へ入る。
今度は暗く狭い部屋で身を寄せ合って座る。
また、あの始業ベルが鳴るまで。
誰も何も話さない。

数時間後、また、始業ベルが鳴った。
また、みんながそろそろと移動する。

その列を抜けるとぼくは、
ぼくらを監視し、誘導する男へ話しかけた。

「ぼくらは、何のためにこんなことをさせられてるんだ？」

男はかなり面喰ったようだ。

ぼくらのうちの誰かが何かを話しかけてくるなんて、思いもよらなかったのだろう。

キョトンとしている。

ぼくはもう一度言った。

「ぼくらは、何をしているんだ？」

男はやつと我にかえったらしく、
みるみる顔を紅潮させると、怒鳴った。

「余計なことは考えなくていい！
言われたことをやれ！」

「いやだ。説明してくれるまでここを動かない」

ぼくは、男の目をまっすぐに見据えるとそう言った。

「うるさいうるさいうるさい！」

お前らにはそんな生意気な口を叩く権利はない！

ほら、早く行け！」

男は、そう怒鳴りながら、ぼくの腕を掴もうとした。

ぼくはその腕を振り払うと、男の脇をすり抜け走り出した。

考えてそう行動したわけではない。
身体が勝手に動いた。

走って走って……！

闇雲に走ると、ドアがあった。

ノブを回す。

鍵はかかっていない。

ぼくはドアを開け、ドアの向こうへ踏み出した。

そこは……。

いままでの場所のように、
壁や天井がなかった。

果てがなかった。

ここは……。

ぼくは一瞬、立ち尽くしてしまった。

ハッと我に返り、

ぼくはとにかく走り出した。

早く、早く……！

「走る」なんて行為も初めてだ。
身体が重い。

思うように走れない。
息が切れる。

走りながら振り向いた。
男は追って来ない。

ぼくは立ち止まり、息を整えると、
あたりを見回した。

いまぼくがいるところは
いままでぼくがいたところとは180度違っていた。
ここには色が溢れ、
ここには上下左右を圧迫するものはなく、
ここには活気が満ちていた。

ここには「始業時間」のベルも「終業時間」のベルもない。
ぼくは初めて、
「生きている」という気がした。

ぼくは、キョロキョロしながら歩き始めた。
目に入る物すべてが新鮮だ。
わくわくした。

あてもなくただ、
毎日アチコチ歩いて過ごした。
不思議と空腹は感じなかった。

ある日ぼくは、
だれもいないガランとした大きな建物を見つけた。
鍵なんか、とつくの昔に壊されてしまっていたが、
中はさほど荒れていなかった。
歩くのに疲れると、ぼくはその建物の中でぼんやりしたり、
まどろんだりした。

そんな毎日がとても嬉しい。

あの単調で退屈で灰色の毎日。
思い出すだけでゾツとする。

相変わらずぼくは、飽きもせず歩き回っていた。

もうすでにあたりは薄暗くなってきたが、
反対にぼくは、
明るい通りへさしかかっていた。

そこに、

様々な色の明かりが眩しいくらいに輝いている。

その明かりの下には、

きらびやかな衣装を身に纏った女の子たちが立っている。

薄桃色の布を身体に巻きつけた女の子が、

にこやかにぼくに手を振ってきた。

ぼんやりとその子に見惚れていると、

目つきの悪い男が二人、

ぼくを挟んで立ち、ぼくを見下ろして言った。

「よう、お兄さん、

あのコが気に入ったなら紹介してあげますよう」

言葉は優しげで、笑顔を浮かべてはいたが、
目だけが笑っていないかった。
ぼくは怖くなって走り出した。

途中で振り返ると、

男たちは追ってくるどころか、

あの薄桃色の女の子と一緒に笑い転げていた。

ぼくは、なんだかいやなきもちになった。

とぼとぼと、

あの建物への道筋を辿る。

ぼくは、なんのために、あそこを飛び出してきたのだろう。

なんのために。

ぼくの居場所はここにはない。

でも、あそこに戻るのだけはいやだ。

いつの間にか、

ぼくは建物の前に着いていた。

ぼくは、建物の中へ入ると、

床へ身を横たえた。

ぼくがいまいるここには、始業のベルがない。

だが、

終業のベルもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2960g/>

始業のベルとともに一日が始まる。

2010年10月20日20時01分発行